物語とつながる、まちあるきニューマガジン

MIJIKAKA

2023.03

vol.1 長崎電気軌道５号系統 石橋〜蛍茶屋

物語とつながる、まちあるきニューマガジン

MIJIKAKA

2023.03

vol.1 長崎電気軌道５号系統 石橋〜蛍茶屋

蛍茶屋

秘密の茶屋　/　霽月

とげとげ　/　長野　大生

新中川町

いつも気付かない日常　/　高以良　こう

たそがれて　そして　/　中村　流

新大工町

だけれども　/　凜奈

桃と家とわたし　/　亀井　琴絵

諏訪神社

一年ぶりのお出かけ　/　平山　かなこ

諏訪とチョコ　/　芽論　総太

市役所

忘れ物　/　峰　勇輝

市民会館クロニクル　/　金原　久美子

めがね橋

ステイ・イン・ワーリー　/　芽論　総太

対岸の人　/　中村　列子

神様がすまう社と、見上げるほど高いビル。その谷間で賑わう商店街。

毎日のようにその姿を変えていく「生きるまち」に、ひっそり隠れるストーリー。

長崎伝習所・長崎を舞台にショートショート塾が贈る

ちょっぴりヘンテコな物語とつながる、まちあるきニューマガジン。

軋む線路と弾む走行音に揺れながら、みじかか物語の世界に誘います。

秘密の茶屋

霽月

「まもなく終点蛍茶屋です。お忘れ物にご注意ください」
電車内にアナウンスが流れる。乗っているお客さんは、次々と電車を降りる準備を始めた。

今から友達に教えてもらった茶屋へ行く。初めて行く場所なのだが、友達から「これ合言葉ね、その場所に着いたら読み上げて。」と言われた。紙を広げると「空飛ぶ眼鏡橋」と書いてある。意味がわからない単語だと思いながら歩いていると、教えてもらった場所に着いた。そこは本屋さんであった。

あれ？　おかしいな、茶屋のはずなのに。

そう思いながら恐る恐る中へ入ると、一人の店主さんが笑顔で出迎えてくれた。

その店主さんへ尋ねてみる。
「茶屋を探してここへ来たのですけれど」
「では、合言葉をどうぞ」
意味のわからない単語を読み上げる。
「空飛ぶ眼鏡橋」
「ありがとうございます、少々お待ちを」
そう言って店主さんは奥へ入っていき、一冊の本を取り出した。
「こちらが入口です、どうぞ」
本が入口とはどういうことなのかと思いながら、恐る恐る本のページを開く。

ん……あれ？

気がつくと私は見知らぬ茶屋の目の前にいた。着物を着た人々が談笑しながら休憩している。
「あら、新しいお客様ね。いらっしゃい、こちらをどうぞ」
笑顔の女性がお茶とお団子を手に出迎えてくれた。
「何も考えずゆっくりしていってね。あなたのような格好の方がたまにお見えになるのよ」
友達もここへ来たのだろうか。
素敵な場所だと思い、お団子とお茶を楽しむ。

ゆっくりとしていると「お客さん」と声をかけられた。
ハッとするとそこは先程訪れた本屋さんであった。
「もう閉店のお時間ですよ」
来店してから五時間もたっていた。

慌ててお礼を伝え店を後にしながら、不思議な夢だったと思い帰路に着く。その途中で財布を出そうとしてバッグの中を漁ると、串が入っていた。
夢ではなかったようだ。

またあの本屋へ行こう。合言葉と団子の串を握りしめ、そう心に誓った。

とげとげ

長野　大生

真っ白なウニが、にこにこしながらこちらを見ている。
いつだったか、我が家の前にある古ぼけた建物が、ごうごう、ぎいぎいと音を立てて姿を変えた。そのとき生まれたこのウニは、朝も昼も夜も、晴れた日も雨の日も、ずうっとにこにこしている。
「河田さん、見て。またこっちを向いて笑ってるの」
「まあまあ、原田さん。きっと私たちのことが気になるのよ」
原田さんはそう言って私をなだめたけれど、このウニはいつ話しかけても「ぼく、本当はピンクなんだよ」としか答えてくれない。ますます気味が悪くなった私は、ちょうど遊びに来ていた河田さんのひ孫にも訴えた。
「ちょっと康一、あのウニを見てごらんなさいよ」
「あれ、新しくできた本屋さん？」
「そうよ、ウニのくせに……」
生意気なのよ、と言いかけたけど、私の方がトゲだらけだと思ってやめた。それからというもの、毎日のように視線を感じるものだからこっちが気になってしまって、ウニのお店をよく眺めるようになった。
子どもからお年寄りまで、このお店には本当にいろんな人が訪れる。入るときは人の数だけの表情があるのに、出てくる人たちはみんなちょっとだけ口角が上がっていて、心なしかウニと似たような顔をしている。そんな表情を見ていると、なんだか私までにこにこしてしまった。
ある日の夜、ウニのお店はいつもより遅くまで灯りがついていた。
「今日はずいぶん賑やかだったじゃない。暗がりにぽつんと灯りがついていたから、蛍かと思ったわ」
「夜ばなしをしてたらしくてね……それより原田さん、よく笑うようになったね」

急にそんなことを言われたら照れる。返す言葉を探す私に、ウニはこう続けた。
「でも、なんだか寂しそう。どうして？」
「うちはね、あなたのお店とちがって毎日のように人が来るわけじゃないの」
「じゃあ、これからもこうやって、僕と夜ばなしをしようよ」
にこにこしながらこちらを見ているウニが、いつもよりピンク色に見えた気がした。

いつも気付かない日常

高以良 こう

思案橋で友達とカフェに行ったあと、美味しかった紅茶のおかげでお手洗いに寄りたくなった。とりあえず近場の駐車場に停めて呉服屋さんにトイレの場所を訊いた。それが新中川町にある丸川公園との不思議な出会いだった。

用を足してからほっとして公園を眺めていると一人のおばあさんが座っていた。とろんとろんとした葛湯のようなものをマドラーでかき混ぜている。九十歳ぐらいだろうか。

話しかけると、豊かになった日本の話をしてくれた。お国のために汗水流してくれた人たちのおかげじゃ。と繰り返しおっしゃった。

六時になると子どもたちが集まってきた。「おばあちゃん、おばあちゃん、今日のなぞなぞ教えて〜」と小学校六年生くらいの男女が六人で問う。「重要なことは入れ替えて教えてくれるんだよ」と彼らが教えてくれた。

「モンナントカ… なんだっかな　あれ食べたい！おばあちゃんわかる？」と訊いた少年に「しんなかがわ」と答える。

「また、隆一くんカッコつけてる〜！」

「『しわがなんか』って言ってるんじゃない？」

「いや、わかった！『わがしんなか』だよ。長崎弁で、和菓子がないよって言ってるんだよ。近くにまんじゅう屋さんあるから買ってくる！　買ってきたら次のヒントくれるかも！」

子どもたちは近くのまんじゅう屋さんに走った。

おばちゃんはうれしそうにまんじゅうを割り、半分を太郎くんに渡した。

「これだよ！　栗のこと！　栗のことをモンブランって言うんだよ。和菓子ん中だったんだね」

隆一くんが言い、他の子たちも笑いに包まれた。

このおばあちゃんはとても重要な役目を果たしていることを感じ、感慨深く思った。

たそがれて　そして

中村 流

ロンドンの街角でパンフレットを差し出されて…遠い異国の長崎の町の。その老婆は私の手にある小説の表紙に目をやると

「あんたもかね……そいなら……会いに行ってやんなさい」

日本生まれのノーベル賞作家のことはご存じだと思う。戦後間もない長崎の人々が描かれた作品で、その中の女の子のことが気になってどうしようもなく……蛍茶屋行きの電車に乗り込んでいた。もちろん、建物や街は物語のあの頃とはずいぶん違う。初めての長崎なのに車窓を流れる山並や匂いはやはり、私には懐かしく、そう、長崎は私の中にすっかり染み込んでいたから。

あの子のような眼をした子供は今の長崎には、もういない。それは分かっている。それでも会いたい。できることならそのページから連れ出す。

かサササー、揺られながら私はあの女の子を想う。あの子もおでこをガラスにくっつけて、窓の外をじっと見ていた。黄昏てゆく街を。

カサササーゴトーササーーそして車内には私一人。

黄昏時———イギリス人の私にはなんとも不思議な響き。この世とあの世が交差する。

すっと何かの気配がして私の傍に影を拡げ、「次はしんなかがわまち」のアナウンスが。

そう、ここがマリコのいる町。

陸橋を渡る。そこから見渡せるのは、私に刻まれている愛すべき中川の町。木造の平屋が斜面におっ被さるように建ち並んでいて四階建てのコンクリートも夕闇に霞もうとしている。雨が降るとぬかるむ空き地の向こうにマリコの家があるはずだ。

中島川の土手方から聞こえる、猫と子どもの鳴き声が。

ちょうどその時、マリコの母親がマリコから猫を引き裂こうとしていた。まさに、あのシーンが起ころうとしている！　私は駆けつける！　母娘の間に割り込む！　マリコと猫を抱きかかえる！

「あなたと約束してたでしょ、マリコちゃん。私クリスティー、あなたの愛読者の」

マリコは眼を見開いて一瞬、微笑した。私の腕にしがみついた。

「アツとミーも連れてってくれるんでしょ」

「そうよ。急いで！」

黄昏時は良い時。日本語にはいろんな表現があってねぇ。逢魔が時———ともいうんだが……魔物に遭遇する時刻……老婆の声？

そのとき、マリコの手が私の腕からするり———

だけれども

凜奈

「きょうのよるごはんなにー？」
「こげん暑か日こそ熱かもんば食べて、良い汗ばかきたかなあ」
「えー、なんでー？　へんなの」
　海水浴帰りなのだろうか。水泳リュックにからわれているという表現が似合う女の子と父親がゆっくりと天満市場を歩く。
　暑い日にあえて熱いものを食べるのかあと僕は妙に感心しながら親子の後ろ姿を眺めていると、女の子が、果物屋の日よけテントに手が届くかジャーンプ！　その姿に魅せられ、くううぅ～！　ぼくも！　いっぱいうごきたい！　刺激が欲しい！　という衝動にかき立てられる。
　ちらっとかんぼこ屋の店主の方を振り返ると、読みかけの新聞を膝にのせてコクンコクンと眠っている。きっと、店主が目を覚ましたら僕はフライヤーの中に再び入れられるだろう。『にどあげ』というものをされる。そんなのは嫌だ！　外に出るなら今だ！　と僕はかんぼこ屋を勢いよく飛び出す。
　うわあ！　目にするものすべてが新しくてカラフルで、僕はどぎまぎしながら進む。するとカンカンとかグシャーンなんていう大きな物音がする。あんな高いところにヘルメット姿のおっちゃんたちが！　どうやら、新しいマンションが建つらしい。
　めまぐるしくこの街は変わっているんだなあ。

　またちょこちょこと進むと、おじいちゃんが「銭湯」と書かれたのれんをくぐる。僕もついて行くと、そこには大きいフライヤーのような空間が。ちゃぷん。浸かってみる。ん？　フライヤーよりもだいぶぬるい。湯気は出ているものの何かが足りない。何だ？　あっ、いつものあのわくわくするような刺激だ。ジューとかプツプツという音とともに全身が弾ける感じ。そうだそうだ、フライヤーで揚げられるときのあの高揚感だ。
　結局お湯に浸かっていても満足感は得られず、僕はとぼとぼと住処へ帰った。刺激を探してかんぼこ屋から飛び出たのに、いつものここが何より刺激的だった。刺激を受けながらも落ち着ける場所。それがこのかんぼこ屋。
　ぼくは今日も『にどあげ』からスタートを切る。

桃と家とわたし

亀井　琴絵

桃溪橋。
私は毎日、この橋を渡る。

春、望まない異動だった。
辞令を受け取った瞬間に、辞めようと思ったくらいだ。
かろうじて踏みとどまったのは、そのときの支店の先輩の言葉があったから。
「おすすめの町を紹介してやるから、そこに住んでみ。気に入ると思うよ」

私は毎日、七時きっかりに家を出る。
家を出てほどなく、桃溪橋が見える。
通勤時間帯だからか、ときおり車が、狭そうに肩をすくめながら通る。
夏、落ちている桃を潰しながら車が橋を渡る様子を、私は複雑な気持ちで見ていた。
私は毎日、朝ごはんに食パンを食べる。
ある日のこと、少し寝坊してしまった私は、慌てて用意をして家を出た。
食パンをもぐもぐしながら橋を歩いていてふと、気づいた。
横のこの家、昨日と違う色のような気がする。
どこにでもある白い家だったが、今日はピンク色になっている。
塗り替えたのかな。
それにしても正面に窓なんてあったっけ。
考えながら通り過ぎて時間を見ると、遅刻寸前で走ることにした。

その日は残業だった。
明日の会議の資料をなんとか仕上げ、最終の電車に間に合った。
夜空を見上げながら橋を渡っていてふと、朝見た家に目がいった。
うん？　煙突なんかあったっけ？
家自体の形も変わった気がする。
首を捻ったが、疲れているせいだろうと、それ以上は考えなかった。

翌日、目覚ましのアラームを必死で止め、なんとか七時に家を出た。
伸びをしながら橋を渡り、顔を上げて、驚愕した。
ゲルが建っている。
ゲルって、あのモンゴルの？
川沿いにそぐわない、草原感。
間違いない。
私が仕事に行ったり、休日にゴロゴロ昼寝したりしている間に、この家は毎日建て替わっているのだ。
秋、私はあの先輩の言葉の意味を、やっとこさ理解した。

それから毎日、私はその家を観察しながら通り過ぎることにしている。
誰が住んでいるのかもわからない、毎日変化する家。
私は毎日、顔を上げて仕事に向かう。
季節は巡り、美味しい桃が実っていた。

一年ぶりのお出かけ

平山 かなこ

僕は長崎に住む三人兄弟の次男である。兄は気が強くて喧嘩っ早いが、正義感が強い。反対に弟は海が好きなのんびりした性格だ。僕らの家は長崎市を一望できる高台にあるのだが、両親が「危ないから外には出るな」と言うので家の敷地内からなかなか出してくれない。家の庭でしか遊ぶことができないが、僕たちは猫や鳩を追いかけたり、鬼ごっこをしたりして楽しく過ごしていた。

秋の涼しい風が吹き始めてきたある日、普段のんびりしている弟が興奮した口調で言った。

「兄ちゃんたち、やっとこの日が来たばい！」

僕は何のことか思い出せずにぼんやりしていると、隣から同じように興奮している兄が駆けてきた。

「やっと家から出れる！　一年ぶりのお出かけだ！」

あ！　と思い出したと同時に家の門が開かれた。そこには大勢の人が歓声を上げて僕たちを出迎えていた。あっという間に男たちに担がれて僕たち三兄弟はお神輿に乗せられた。行ってきます、という暇もなく、家の前の長い階段を物凄い勢いで下って行く。

途中、広い道の真ん中で止まった。休憩かと思ったら大勢の人々が集まってきて、僕たちが乗るお神輿に賽銭を投げたり、お神輿の下をくぐり始めた。

兄の周りには病気にならないように、悪い事が起きないように、と祈る人が集まってきた。兄は笑顔で「大丈夫、大丈夫！」と言った。

弟は久々に見る長崎の景色と人々に興奮していた。そこに髭を生やした図体の大きい男が現れて弟の前で合掌し、小さな声で呟いた。

「今年は大漁でありますように。そして、海の事故が起きんごと見とってください」

弟は突然やってきた男に驚いたが、姿勢を正し、「しっかり見守ってます」と伝えた。

僕の周りに集まる人は例年通り女性が多く「良い人と巡り会えますように！」と口にしていた。

どうやら僕には縁結びの力があるようだ。

僕たちは今日から三日間、市内各所を巡り、町の催し物を拝見する。明後日にはまた男たちが僕らを担いで石の階段を駆け上がり、あの眺めのいい家まで帰してもらう。次に僕らがお出かけできるのは一年後の十月だ。

諏訪とチョコ

芽論 総太

近所の駄菓子屋に変なお菓子が増えていた。

チロルチョコと似たパッケージで、包み紙には「でんしゃ」と書かれてある。

「おばあちゃん、これは？」

「チロルチョコさね」

「ふぅん」

何だかよく分からなかったけど、いつもの十円の安さに、僕はひょいと買い物カゴに入れた。

小学校六年生の頃だった。

そんな「でんしゃチョコ」と再会したのは、それから二十年ばかり経った日のことである。

僕はランドセルの代わりにスーツを着て、地元から程遠い長崎で暮らしていた。

「なんだ、まだあったのか」

気がついたら買っていた。

二十年前と変わらない甘い匂いと、パッケージ。

このチョコの面白いところは、包み紙が電車の切符を模したデザインになっていることと、実際にこれで電車に乗れてしまうということだ。二つ買えばしっかり往復分になる。

小学生の頃は大したお小遣いも無かったので、これでよく電車に乗って、遠出をしたものだ。長崎も使えるのだろうか。そもそも、大人が使えるものなのか。

「『でんしゃチョコ』ですね。大人は諏訪神社までしか乗れんとですけど、良かですか」

「あ、はい」

どうやらちゃんと使えるらしい。

少しの恥ずかしさを感じつつも「どうせここまで来たのだから」と蛍茶屋行きに飛び乗った。

進行方向とは反対側の、一番端の座席に座る。昔からの特等席だ。運転席から覗ける、ぐんぐん過ぎていく風景が大好きだった。

ガランゴロン、ガランゴロン。

後ろ向きに走っているような感覚が、次第に別のものに変わる。

まるで、遠のいてゆく過去を見ているようだ。

溢れてくる郷愁が電車に吸い取られていく。懐かしい子どもの頃の感情を、過ぎていく風景と共に置いていく。

僕の心がすっかり大人になってしまうと、電車は諏訪神社に着いていた。

運転手に切符を手渡して、過去から降りる。人の流れに合わせて地下通路を歩いた。地下は薄暗いはずなのに、なぜか憑き物が落ちたような気分だった。

忘れ物

峰 勇輝

○○○○年○月○日

世界は変わった。

それまで認識されなかった世界が認識されるようになったのだ。『これはすごい発見だ』と騒ぎ立てる様子もなく、世間はこれまで通りの日常を送っているようだ。

△△△△年△月△日

それから少し時間が経った頃、また世界が変わった。

それまで認識されなかった世界が、ぼんやりとだが視認されるようになったのだ。

前回同様、『これはすごい発見だ』と騒ぎ立てる様子はなく、世間はこれまで通りの日常を送っているようだ。

それから時間が経つごとに少しずつ、だが確実に世界は大きく変わっている。

あるときは認識できる世界が広くなったり、またあるときはそこに住んでいる人達と意思の疎通ができるようになったり、といった具合に。

だが、その大きな変化さえも、ごく一部の人がその中のいくつかに気付いて歓喜するだけで、世間は相変わらずこれまで通りの日常を送っている。

□□□□年□月□日

あれから十数年が経ち、世界の構造が少しずつ理解できるようになってきた。

どうやら一度認識したものは意識して観察していかないと、イメージを大幅修正するようなことが起きない限り変化を認知することができないようになっているらしい。『当たり前のこと』つまり『今まで通り』に感じてしまうということだ。

私自身、毎日のように見ている市民会館でさえ、補修工事が始まったときに「あ、あんなところに亀裂があったのか。あ、あそこにも」と変化を見逃していた。

××××年×月×日

今日、私は大人になった。

世間のどこかでは新しい世界が産声を上げている。

だが、あの頃のように『すごい発見だ』と驚く私はもういない。

市民会館クロニクル

金原　久美子

目覚めると、杏子さんは居なくなっていた。長い間想いを伝えることもできなかったけれども、ただ姿を見つめているだけで幸せだった。杏子さんの凛とした立ち姿に、周りの人達が霞むほどのオーラを感じたものだ。なんと言っても、秋の彼女はとても美しく、道ゆく人々も振り返って仰ぎみたり、一緒に写真を撮ったりしていた。写真にこっそり一緒に写り込んでみたりするのが、私の密かな喜びであった。

杏子さんと手を繋ぎたい。杏子さんの隣りで話をしたい。杏子さんのそばで笑顔をずっと見ていたい。そう願い続けていたが、願いが叶うことはなかった。

杏子さんのいない冬は耐え難く、春には私も力尽きてしまった。

市民会館横の銀杏並木は、夏には緑色の葉を茂らせて、通りを歩く人々に木陰を提供し、秋には見事に色づき、長崎の秋に彩りを添えてくれている。

銀杏が色づく秋に、並木をぐるっと一周してから拾った落ち葉を一枚、想いの相手に渡すと恋の願いが叶うという、知る人ぞ知る長崎の恋愛スポットなのである。

そんな銀杏並木のお隣の市民会館でのお話。

あら杏子さん銀次さんおはようございます。市民会館のロビーでお見かけするカップル。この二人は、市民会館のスタッフの間でずっと話題になっている。その老齢のお二人は仲睦まじく、いつも静かに寄り添って、楽しそうに話しながら市民会館のロビーで何時間も過ごされている。

ご夫婦なのか？　いや、しかし、ご夫婦ならわざわざ連日市民会館に来るでしょうか？

スタッフ達の、ウワサ話は尽きない。

あら杏子さん銀次さんお帰りですか？

にこやかに会釈をして二人が立ち去ると、ロビーには、黄色い落ち葉が二枚。

ステイ・イン・ワーリー

芽論　総太

変則のある一定のリズムにまぶたが落ち、慌てて開く。同じ公共交通機関でもバスとは違う心地よさに些か疑問を感じた。なぜ、この街の人々は眠らずに座っていられるのか。どうして誰も口を開かないのか。

「日本人はみんなニンジャなのさ」と、数か月前に日本に留学した兄が言っていたことを思い出す。さすがに冗談だと思っていたが現実味を帯びてしまった。

初めての留学が長崎で良かったと、心底思う。首都・東京に行った友人からは何度もトレインを乗り間違えて号泣する電話が掛かってきたし、あまりの人の多さに吐き気がするとも嘆いていた。そしてそのたびに励ましの電話をかけ直すのだ。「ユーキャンドゥイット」。そして自分は悠々とこの街のタイルを踏み歩く。路面電車を乗り間違えることもなく、目的地までガタゴトされる。ちょうどいい喧騒、それに混じる母国語、優しい日本人。覚えたての日本語が不安だったが、この街の人たちはみんなが良くしてくれた。

電車に揺られること数分。睡魔との闘いに今回も勝ち越し、目的地へと到着した。母国にいる兄から「ワーリーのメガネが長崎に落ちているらしいから写真を撮って送れ」とメールが来たときは何が何だか分からなかったが、街を歩いて納得した。たしかに、あちこちにメガネが紛れている。それも、人が渡れるほど巨大になって。

下宿先のイトウさん曰く、これらは本当に「めがね橋」と言われているらしい。メガネの形をしているから、めがね橋。撮った写真を兄にメールするとすぐさまピエロの絵文字が返ってきた。そして次のメールでは「きっと眠っているワーリーの上に都市ができたんだ。長い年月が経っているから、何もかもが石化してしまっている。坂が多いのもワーリーの身体を這っているからなんだ」なんてことを言っていた。

あれから僕らの中で、長崎はワーリーの街ということになった。兄はしきりに新しい写真をせがんでくる。僕は今日も電車に乗って、あの絵本のようにワーリーのかけらを探している。

対岸の人

中村　列子

斉藤さんと島田さんは中島川沿いに住んでいた。

私は斉藤さんに一方的に好意を抱いている。

斉藤さんは当時勤めていた会社の顧客だった。

ある日、彼が瀕死の猫を抱いて「助けてくれ」と飛び込んできたのが最初の出会いだった。風采の上がらないおっさんが目をキラキラさせながらやってきた。私は彼の瞳にキュンとなってしまい、彼との仲を取り持ってくれと上司にのたまった覚えがある。

斉藤さんは斉藤さんのままで、その猫と中島川沿いに暮らしている。夕暮時になると斉藤さんは中島川に面したベンチに座り〈民の暮らしは賑わってるか〉とばかりに世間を眺めている。

「斉藤さん」

「あ、美人がきた」

「暑かね」

「暑か」

冬になると「暑かね」が「寒かね」に変わる。

いつも同じ景色にいつもと同じセリフだ。

好きだ！　と世界に向かって叫ぶほどでもないが好きだな♡

さて、もう一人の住人島田さん。

彼は芸術家然とした空気を漂わせ、春先のキャベツ畑を飛ぶモンシロチョウのごとく周りにお金持ちのおば様方をたむろさせている。

私のことは小間使いと思ってるふしがある。同じ女なのにと言うと負け惜しみに聞こえるから止めておこう。

彼は夕暮れとともに中島川を下り繋華街へと急ぐ。

下世話な中年女は「こいつ何して食ってるんだ」とスーパーへ急ぐ。

彼は猫三匹と兄と暮らしている。

驚いたことにニューヨークから個展開催の打診が来てるらしい。

「はい、はいそれは景気のいいお話しですこと」

まもなくして、斉藤さんの姿を中島川のベンチで見かけることが少なくなった。

島田さんからの呼び出しもめっきりなくなった。

二人ともそれはそれで寂しいではないか。

イチョウが色づく頃

斉藤さんは施設に入所した。斉藤さんのことだから職員さんを笑顔にしてる画が容易く浮かぶ。

一方の島田さんは突然亡くなった。

ニューヨークでご機嫌よく飛び回るはずだったのでは？

まもなく中島川沿いに

紫鼠の毛並みが美しい愛嬌のない猫が新しい住人として現れた。

【路線図】　長崎電気軌道５号系統　石橋～蛍茶屋

大浦海岸通

メディカルセンター

新地中華街

西浜町

浜町アーケード

めがね橋

市役所

諏訪神社

新大工町

新中川町

蛍茶屋

石橋

大浦天主堂

長崎を舞台にショートショート塾とは？

長崎伝習所（長崎市・市民協働推進室）における塾事業のひとつ。「アイデアを生かした印象的な結末のある物語」と言われているショートショートを通じて、発想力や読解力の向上や生涯学習の促進、地域の魅力を再発見することを目的に活動をスタート。約１年間の活動で、塾生を含む延べ 50 名に創作ワークショップを実施。その後、2022 年 2 月 22 日に長崎を舞台にしたショートショートアンソロジー『道に落ちていたカステラ』を発行した。2023 年 4 月からは塾活動を卒業し、「ショートショート長崎」として創作や読書の場づくりに挑戦します。

長崎を舞台にした計 44 作がぎゅっと詰まったショートショートアンソロジー『道に落ちていたカステラ』を、ご自宅のパソコンやスマホ、タブレットからお楽しみいただけます！ちょっぴりヘンテコなお話から、あっと驚く結末まで。読書が苦手な方も必見です！

ショートショート長崎の公式サイト。塾生やワークショップに参加された方がこれまで執筆された作品や、新たに書き下ろした作品などを不定期に発信しています。ワークショップに興味のある方や、作品を公開されたい方は、ぜひお気軽にお問い合わせください！

塾活動（ワークショップ）の様子

フィールドワークでアイデア探し！

和気あいあいとした雰囲気での活動です

ここからどんな物語が生まれる…？

これであなたもショートショート作家になれる！？

創作のヒント

Step.1 思いつく言葉をとにかく書きだそう

コップ、えんぴつ、時計、テレビ……いま身の回りにあるものや、夢に出てきた有名人、好きな食べ物など、思いつく言葉をとにかく書き出してみよう！名詞以外の言葉もあるとなお良し。10 個以上の言葉があると次のステップがより楽しめます！

Step.2 出てきた言葉を組み合わせてみよう

出てきた言葉を組み合わせてみよう。AI コップ、えんぴつ大根、回らない時計、地を這うテレビ……一見、意味のわからない言葉に、色やスパイスを加えていくのはあなたです。ここで組み合わせた言葉から、物語をつくることができるんです！

Step.3 それって一体どんなものだろう？

AI コップ。自動でおかわりを注いでくれるコップ？それって超便利じゃん！居酒屋に持っていくと注文しなくても無限に飲めそう。でも、おかわりが欲しくないときも注がれたら困っちゃうな……組み合わせた言葉から、自由に想像を広げてみよう！

Step.4 全部つなげたら物語のできあがり！

広がった想像を整理してみると、あっという間に物語が完成してしまうのが、ショートショートのいいところ。どんな展開でも正解です。人物や場所、出来事、気持ちなどの要素を加えてみることで、おどろくほど物語の幅が広がっていきます！

あぁアーケードは今日も雨だった

片山 健太

先週、商店街のアーケードの屋根下から雨が降るようになった。原因は全く不明。
しとしと、ぱらぱら、ぽつぽつ、ざーざー、ごうごう。24 時間ずっと雨が降る。天候に左右されず買い物ができるという、アーケードの長所が台無しだ。不景気の最中、売上が更に下がってしまうと、商店街の店主たちは頭を悩ませた。

ところが、それは取り越し苦労だった。
『雨降るアーケード』はネットや SNS で話題になり、観光客が急増。それぞれのお店は雨宿りの軒下を提供し、行き交う人々とコミュニケーションを取った。
前向きになった商店の人たちは、雨ファッションや雨グルメなども生み出し、過去一番の最高益を叩き出す。昔のような賑わいに、商店街の人々は喜んだ。また、アーケードの雨水はとても水質が良くて美味。それは特産物となり、長崎には雨水産業までもが産まれた。まさに、恵みの雨だ。

それから 5 年近く経った頃、世界は気候変動によって雨が降らなくなっていた。危機的な水不足だ。
世界は長崎のアーケードに目を付け、水不足の解消に望みをかけた。しかし、世界の頭脳が集まっても、雨が降る仕組みは一向に解明されない。
そんな中、時の政権と大企業は手を組んで大儲けを狙う。アーケードの屋根を取り外し、国立の研究施設に保管する計画。雨水や未だ解明されてない仕組みを独占しようとしたのだ。なんと人間は欲深いものか。

しかし、屋根の一部を取り外して数日経つと、屋根部分から降る雨が全て止んでしまったのだ。大儲けを企んだ者たちは罰を受けることになった。
タイミングを同じくして、世界には再び雨が降りはじめ、水不足は解消されていった。そしてアーケードにも屋根を戻す工事が行われた。

雨という売りがなくなり、落胆した商店街の人々であったが『雨降るアーケード』で人々が過ごした時間は、商店街と人々のつながりを取り戻してくれた。

昔のような活気のあるアーケードが目の前には残っていた。雨降って地が固まった。

？白？昼？夢？

灯月白珠

ガタンゴトン、ガタンゴトン……。

電車の揺れと昼食後の時間帯は、どうしても眠くなるというもの。
クーラーついてても、人が多くて体温上がるしね。そのせいで、少し酔ってしまったけど。
……そんなことより。
車内が変。
乗客が誰もいない。ぎゅうぎゅうだったのに。
長くは寝てないし、一気にいなくなるはずないと思うんだけど。乗ってくる人だっているはず。
周りを見回すと。

ゆらり。

つり革の間を泳ぐ、魚影が一匹。床の上でも、数匹の魚影が泳いでいた。
ぼんやりと眺めていると、ノイズ交じりの声が『浜町アーケード』を告げる。
丁度良いや、降りよ。風に当たりたいし。
電車が停まって扉が開くと、魚影たちはひんやりとした風に溶けていった。
揺れる赤いランタンから、クスクス聞こえる。
横断歩道で人の形をした影たちとすれ違い、アーケードに入った。
鏡文字になっている二文字の看板、ずらりと並ぶガチャガチャから聞こえる話し声、不思議な薬品のようなにおい……。

「あ」

道のど真ん中で、青い猫が座っていた。
影でも透けてもない、実体のある猫が。
……ここで猫を見るのは珍しいような。
足にすり寄ってきたのが可愛くて、つい撫でると、猫は気持ちよさそうに喉を鳴らした。

暫く撫でていると、誰かに肩を叩かれ、振り返る。

「なんしよっと」

怪訝そうな顔をした友人がいた。

「可愛いやろ」

猫を見せようとすると、いつの間にか猫がいなくなっていた。

「なんもおらんやん。……それより、丁度いいとこにおったな。ちょっと買いもん付き合って」

こちらの返答は待たずに、友人は歩き出した。
気分転換に来ただけだから、予定もないし良いけど、急だなあ。
ふう、と息を吐いて、辺りを見回す。

「……あーあ」

軽度の酔いも落ち着いて、アーケードもいつも通りだ。
友人・恋人同士、親子連れで賑やか。なんだったんだろうな、さっきの。疲れてんのかなあ。

「ま、いっか」

軽く伸びをして、友人の後を追う。靴に付いた青い毛は、多分、気のせいだろう。

安息の日

中岡 党予

　何もない西浜町で降りて、スマホをカバンから取って得意の声色を変えて電話した。
　すんなり学校の休みが取れた。ちょろいもんだ。
　さて、どうしようかと考えようとしたとき、ベンチに座っている一人の青年が目に入った。その青年は頭に鳥が乗っている変なおじさんの銅像の横に座り、じっと見つめている。
　ここに立っている訳にもいかないので私もそこへ向かい、花束を持った少女の銅像の横に座ったところで青年から声かけられた。

「……君、学校行かないの？」

　ちょっと怖くなってすぐに立ち去ろうとした。

「名前なんて言うの？」

　すかさず聞かれた。

「……あ、あおい」

　反射的に名乗ってしまった。

「あおい……綺麗な名前だね。僕は亮太って言うんだ」

　聞いてもないのに名乗られた。

「あおいちゃん、この彫刻。凄いと思わない？」

「……え？」

「この彫刻は黒川晃彦の作品なんだ。『彫刻は人が参加することで完成する』が信条の人でさ、ここに座った時点で僕たちも黒川晃彦の作品になるってことなんだよ。黒川さんの作品はお茶目なところもあるんだ。それがこの頭に鳥を乗せたおじさんだよ。そしてこのポコンと出たお腹。彼の作品は諫早の眼鏡橋のところにもあるんだよ」

　亮太は優しい笑顔を私に向けながら聞いてもないのにペラペラと話してくる。

「風景の中に溶け込んで行き交う人とコミュニケーションして自然そのもののように存在している…。なんかめっちゃいいよね」

　変な人だ。
　……。
　でも、この変な感じ嫌いじゃない。
　落ち着く。

「そうだ、あおいちゃん。今日は僕と一日出かけよう」

そう言いながら立ち上がり、私の前に手を差し伸べた。
すると、優しい風が吹き出した。
夏なのにどこか優しくて気持ちいい風。

「学校サボったんでしょ。大丈夫。僕も今日大学サボってるんだ」

そう言って笑った亮太の顔はどこか懐かしい優しい笑顔だった。

すれ違いのその先に

堀畑 潤羽

「ハァ……」

　7月下旬の中島川に僕のため息が消えていった。穏やかに流れ続ける川を見ていると、新卒1年目の僕の悩みがうんとちっぽけに思えた。
　真っ昼間の中央橋は灼熱だが、冷房の効いた会社のオフィスよりずっとましだ。
　小学生の男の子が、家族と手を繋いで楽しそうに隣を通り過ぎていった。西浜町電停から電車に乗るらしい。

「……幸せそうだなぁ」

　思わずつぶやいてしまった。家族との楽しい時間なんて、今の僕には到底手の届かないものだ。なぜなら、最近は家に帰っても仕事のことしか考えられなくて、イライラしてばかり。そのせいで家族とのすれ違いも増えてしまったからだ。今では何故か意固地になって、会話がめっきり減っている。

「ハァ……」

　そんな風に仕事や家族のことを考えるほど、ますます情けなくなって僕はまたため息をもらした。
　もうすぐ休憩時間が終わる。下を向いていても仕方がないので、中央橋から辺りを見回してみた。
　プァァァと電車の警笛が鳴った。不気味なくらいうるさい。僕は音の方にじろりと目線を移した。
　5号系統、蛍茶屋行きである。その時、反対方向から別の電車がやって来た。2両が目の前を今にもすれ違おうとする瞬間、僕は車内のある人物に目を奪われた。

　幼い僕が座っていたのだ。両隣には、母さんと父さん。みんな明るい表情をしている。どうして電車の中に……と思う間もなく、僕の声が聞こえてきた。

「今日はどこに行くの！？」

　その時、一気に思い出が蘇った。これは小学生の頃の僕だ。路面電車に乗って家族で出かけるのが楽しみで仕方がなかった頃の———

　気がつくと、2両の電車の距離は随分と離れていた。心は不思議と晴れていた。

「父さんと母さん、誘ってみようかな。……お出かけ」

　そんな言葉が、ふいに出てくるくらいには。

———あれから10年が経った。今日は家族でお出かけの日だ。

「パパ！ ママ！ 今日はどこ行くの！？」

　目を輝かせて、息子が聞いてくる。
　僕は答えた。

「ほら、あれに乗って行くんだよ。今ちょうど、すれ違ったやつ！」

龍はいずこに

鰺

先日、祖父母に旅の予定と行先をついこぼしたところ、必ず中華街に行けと言われた。

「だまされたと思って。あの街には龍がいる」

龍の話はうんざりだったが、結局、旅の予定を組み替えた。

かつてはいたるところに龍が住んでいた、らしい。幼い頃から、何度もそう聞かされてきた。今や龍たちは様々に姿を変え、絵画に見るような荘厳な姿は見られなくなっているという。よくある伝承、昔話の類いである。
飛行機の窓の外を見やる。ウィングにまとわりつく雲が、ひょろひょろと伸びている。おおかた、ああいう雲や霧を【龍】に見間違えた、誰かの戯れ言に違いなかった。
空港の自動ドアを抜けて、長崎駅までのリムジンバスに乗り込む。

「去年すうぱいこ食べた店におった子、まだおるかな。あーそう銀の」

言葉の訛った隣客の通話を聞き流して、イヤホンを耳に押し込んだ。

長崎駅から路面電車に乗り換える。がたん、たたん、と小気味よく車体が揺れる。瞼も落ちてくる。「しんち ちゅうかがい です」のアナウンスで慌てて飛び起きた。
ずうと横たわる川を覗きながら少し歩けば、赤々とした大門が現れる。決して長くはないが、密集した【異国】への入り口だ。なんとなしに門を仰いだ。
門に巻き付く龍の眼が、ぎょろりとこちらを見下ろしていた。
ひゅ、と喉が鳴る。視線から逃げて門の内に駆け込んだ。

呆然とした。
そこかしこに、龍。龍。龍。
鯉の泳ぐ池から、金魚の様に赤く小さな龍が顔を出す。中国風な土産物の店には、黄や赤の提灯に紛れたガラスの龍の置物……に、更に紛れた、透明な龍。

龍が、いた。

ある中華料理店の前には、一組の龍の石像。修学旅行生らしい高校生たちが、どこか照れたような、しかし誇らしげに首をもたげる二頭の石の龍を撮影している。
ざあと正面から強い風にあおられて、目をつむった。直後にわっと上がった歓声に思わず振り返る。銀色の光を跳ね返して中華街を貫いていく、巨大な尾だけが見えた。

中華街のバイトリーダー

もりきち

新地中華街は毎年多くの観光客で賑わい、それはそれは美味しい料理が楽しめる贅沢な場所でありながらも、伝統行事の際などには地元の人も多く足を運ぶ、県内外問わず人気の場所である。

そんな中華街のお店は毎日大忙し。厨房のシェフは、毎日数百人分の料理をせっせと作っている。もちろんここには最高ランクの腕前を持った世界有数のシェフが集まっているのだが、彼らは調理だけに専念したいがために、調理以外のことは全てバイトリーダーに任せている。

このバイトリーダーの数名こそが、この中華街を支えていると言っても過言ではない。彼ら彼女らの仕事は表に出ることは中々ないが、今日はそんな縁の下の力持ちを紹介したい。

まずは「佐桝くん」。
中華街は他の地域に比べて年間平均気温が５度くらい高い。熱々の料理とシェフが料理に込める熱とでお店はもちろん、中華街周辺はとにかく暑くなる。そのままではお客さんが熱中症で倒れて食事さえままならない。そこで佐桝くんの出番というわけだ。
彼はとにかく早い。物凄いスピードで移動をしながら店中、中華街中を走り回る。三国志とかの映画で出てくるような、あの赤と黒のどでかい団扇（偉い人に仕えている女性が両手でゆっくり仰いでいるイメージがある）を両手に持ち風を起こし、熱を冷ます。佐桝くんは普段はホールメインだが、気温の上昇を感知すると他のバイトスタッフに仕事を振り分け、自分は全力で冷ましに行く。仕事人だ。

お次は「沙益ちゃん」。
中華街で出される料理はスパイスの効いたものが多い。一流シェフが使うスパイスはこれまた一流なのであるが、そのあまりのパンチに、料理を食べたお客さんが中華のパラレルワールドに取り込まれることも多い。そんな夢の世界から現実の世界に連れ戻すのが沙益ちゃんの真の仕事なのだ。
沙益ちゃんは普段は厨房の皿洗い担当。パンチの効いたスパイスの香りを真横で嗅ぎ続けている彼女にとって、正気を保つことは容易いこと。食事後、美味しすぎて夢の世界に取り込まれたお客様に、沙益ちゃん特性のスパイス（数年のバイト経験で、シェフの使うスパイスの効力を掻き消すオリジナルスパイスを開発した）をふりかけ、まじないをかける。そうするとお客さんは正気を取り戻し、会計を済ませ帰っていく。パラレルワールドに取り込まれていた時の記憶は消えているから、沙益ちゃんの存在にも気づかないというわけだ。

さて、お次は……。
おっと時間がきてしまったみたいだ。
まだまだ紹介したいバイトリーダーはいるが、今回はこの辺にしておくことにする。

何はともあれ、中華街に行ったときはあれこれ気にせず料理を楽しんでほしい。

長崎ランタン軌道

木村 加世子

　グォ～ガコガコン……深夜、市内中心部から新地中華街方面へ走る自車の隣を路面電車が並走する、長崎では日常の光景。唯一違ったのは、車内にランタンが灯っている。

「あれはランタン？ 今は夏だし車内にランタンって変ね」

　そう思ったとき、メディカルセンター手前の信号が赤に変わり車を止めた……だが並走していた路電は直進して行く。

「ちょっと、やばいって！」

　長崎駅方面からの車が線路上を通過し始めて

「ぶつかる！」

　顔を伏せて目線を上げると何事もなく、路電は姿を消していた。いつだったか祖父から聞いた……長崎は原爆被爆地でお盆が近づくと夜な夜な、終戦当時の小豆色の路電が走り、家に帰ろうと多くの御霊が乗降するという。とすると、車内の灯はランタンではなく御霊だったのか。
　数日後の晩、精霊流しを見終わって歩いて帰宅中メディカルセンター前を通りかかると、恐竜像前にリュックを背負った１人の少年が座り込んでいた。

「どうしたの……お家の人は？」

「僕、恐竜博物館に行きたかったの、でもケガしちゃって」

「ケガ…もういいの？」

「ここに入院してたの」

「メディカルセンターに？ 退院できたんだ」

「ケガが治ったら連れてってくれるって、爺ちゃんと約束したから待ってるの」

「お～い、裕太！」

　見るとメディカルセンター電停に小豆色の路電が止まっていて、乗降口から老人が手招きしている。

「爺ちゃん！」少年が駆け寄ると「待ったか？ じゃ行こうか、乗れ」「電車で行くの？ やった！」老人は少年の頭を撫でながら「西方丸いう船にも乗れるとぞ、船……好きやろ？」「行こう、早く！」小豆色の路電は２人を乗せて行ってしまった……。

　数日後、ネットニュースで知り得たことだが、GW に家族連れの乗った車が事故に遭い、祖父と孫が亡くなったそうで、孫の名前は「裕太」と書かれていた。

「恐竜博物館……行けたのかな」

　精霊船・西方丸に乗って極楽浄土へと旅立った２人。
　グォ～ガコガコン……小豆色の路電は、今年もお盆が近づいて御霊を乗せて走っている。

もう一つの星

香川 明世

　市民病院の交差点を真上から見ると大きな星が一つ
　この星だけにできること

　マップで星を中央の位置に合わせる　航空写真に変更
　スワイプ　歩行者がそれぞれの方向に向かっているのが見える
　もう少し拡大　その人たちの表情まで見える
　もちろんそれだけでは一人一人の気持ちはわかるはずはない

　ここで一人ずつタップ

「毎日退屈だなあ」

「今日も患者さん多いかな…」

「さようなら長崎、東京でも頑張るよ」

「ここが長崎…これからどんな生活が始まるんだろう」

「今日も昼寝しないな、しょうがないか」

「ねぇなんで寝てくれないの、私の育て方が悪いの？」

「初めてのお給料、何を買って帰ろうかな」

「ハァ、もうすぐお義母さん帰ってきちゃう」

「ねえ！お母さん！お願いだから目を覚まして！」

「今日のプロポーズ、絶対成功させるぞ」

　私にとって何気ない１日も、誰かにとっては一生忘れられない１日
　私がこんなに悩んでいるのに、誰かにとってはどうでもいいこと
　私が心の中で笑っている横で、誰かが心の中で泣いている

　それが人間、それが社会、それが時の流れ
　星は今日も色とりどりに輝きを放っている

大浦海岸通で降りて

らすてぃ

「少し遅れる！」というお決まりのメッセージが届いたのは、ちょうど大浦海岸通りの電停に降り立ったときだった。この友人と待ち合わせて、このメッセージが届かなかったときなんて一度もない。そしてこの友人の言う「少し」が約１時間くらいであることもわかっていた。

　時間を潰すため、横断歩道を渡って水辺の森公園に入る。広場には珍しく誰もいなかった。話し声も風の音もしない。海の方へゆっくり歩いていくと、不意にどこか懐かしさを感じる楽器の音色が聞こえてきた。さっきまで誰もいなかったはずと、音の発生源を探して公園の方を振り返る。

　そこにはいつの間にか、一人の男性が佇んでいた。遠目から見ても日本人ではなく欧米人であることが窺える。

　男性は袋のような何かを脇に抱えて、それを吹いていた。スコットランドの民族楽器、バグパイプだ。私はそれを南山手で行われるお祭りで見かけたことがあった。何もないときに見るのは珍しい。何かの練習だろうか？

　その男性と音色に興味が湧いてきて近づこうと一歩踏み出した途端、強い風が吹いて思わず目を閉じてしまった。風の音がよく耳に響いた。今までバグパイプの音しか聞こえなかったのに。
　風が止んで恐る恐る目を開けると、そこに立っていたのは男性ではなく。

「ちょっと！」

　遅刻魔の友人だった。

「急いで来たのに待ち合わせ場所にいないし、連絡しても返事ないし！」

「ごめんごめん」

　スマホの着信音に全く気がつかなかったのかと、慌ててスマホを取り出して通知を確認しようとして驚いた。

「1 時間経ってる？」

　小声でそう呟いた。バグパイプの演奏を少し聞いただけで？　辺りを見回しても、もう彼の姿はなかったしバグパイプの音も聞こえなかった。

「遅くなって悪かったよ、なんか奢るから行こう」

　彼女はそう言って、もと来た電停に向かって歩きはじめた。私もその後に続く。
　友人の背中の向こう側には南山手が広がっている。

路面スライダー

青い

　路面電車みたいって、はじめて言われたな。
　でも確かに今日の服は上下とも、たったいま通り過ぎた「みなと」みたいな青だし、リュックからは歩くたびにガタンゴトンって音がするもんね。何の音だろうね。わはは。
　相槌もだって？　え、警鈴みたい？　さっきファーッて警鈴出てたって？それは知らなかった。路面電車みたい。

　路面電車が好きで、各電停で降りては写真を撮るのを趣味にしていて、だから仲間内では路面スライダーって呼ばれているけど、もしかしたら違う意味で呼ばれてたのかも。
　路面スライダーって何かって？　路面によく乗る乗客、ライダーだからくっつけて路面ライダー。間にスをつけたらロマンスっぽくない？　ってことで路面スライダー。よくない？　気に入ってるんだ。

　そう言えば昔、ここで写真を撮ったときに、君によく似た人をモデルに写真を撮らせてもらったことがあったな。今日はあのときと同じいい天気だ。まるであの時にタイムスリップしたみたい。

　周りの友達は派手で、自分は地味だから知り合いに頼んで素敵な洋服を作ってもらったって言ってたな。確かにあのとき、あの洋服と同じものは見たことがなかった。
　君が着ているみたいにファスナーが独特でね、お腹から肩にかけて大きなカーブを描いてね。石畳みたいな柄が印象的だったな。
　本当にその洋服が気に入ってるんだろうね。とてもいい顔をして写ってくれたんだ。

　あのときは何も言えなかったけど、いまならその子に言える気がするんだ。「じゅうぶん君は素敵だよ」って。洋服は自信を出すきっかけになっただけだって。
部屋のポートフォリオにそのときの写真があるから帰ったら見返そう。懐かしいなあ。あの子、元気かな。

　……あ、ごめん、ちょっと１枚。

カシャッ

　いきなりごめんね。いまの、君の笑顔は絶対にカメラに収めないとって思ってつい。どうしたの。なんかいいことでも思い出した？

　……え、嬉しかったから？

サウンドスケイプ紀行文

森 恭佑

ぼくは長崎の「道」。
いつでも、どこにでもぼくはいる。ただでさえ階段や坂道が多いでこぼこ道だから、ちょっと変な音が出ちゃうんだ。長崎はびっくりして、面白くて、不思議な音だらけ。

例えば、電車の音。ぼくの体の隅々には路面電車の線路が走っているんだよ。各地で「ぷしゅーっ、ガタンゴトン、ふぁん！」。中でもここ大浦天主堂の電停は、ちょっとマニアックなんだよね。

「ぷおおおん……ガタンゴトン！　ガタンゴトン！　… …ぷおおおん……」

川に蓋をするように線路があるから、ここで聴く路面電車の音は、ぐわんぐわんと響いて走っていく。観光客の足音と入り混じって賑やかなのさ。

「ポツ……ポツポツ……」

あれ、雨が降ってきたね。ぼくはどこにも隠れられないから、濡れちゃうな。

「ぱらぱらぱら……ざぁああーー……」

あーあ、ひどくなってきた。あ、そうだ……！　せっかくなら、あそこに行ってみようよ。雨の日といえば、ドンドン坂。しとしと石畳に降ってくる音も気持ちいいんだけど、ぼくのそばで流れている溝の水路に耳を澄ませてみて。

「チョロロロ……ジョロロロ……」
「パシャパシャ！　……ばしゃばしゃ！」
「ドドドド！　ザザザザ！」

坂を上から下へとくだってみると、流れる水の勢いが途中で変わってるみたい。水路が狭かったり広かったり、勢いが強かったり弱かったり。いろんな音が聴こえてくるね。

夕立が止んだ。そろそろ、あの時刻かな。

「カーーン……カーーン……」

教会の鐘の音が聴こえてきた。大浦天主堂だ。

「ごーーん……ごーーん……」

そして、教会の鐘の音に応えるみたいに、近くのお寺の鐘をつく音も始まった。

「カーーン、カーーン……ごーーん……カーーン、カーーン……ごーーん……」

まれに２つの音が重なって、町中に祈りの音楽が響き渡ることがある。きっと、「風」さんの仕業だね。ふわっと港のほうまで連れて行ってしまうから、ほら、あの船も汽笛を鳴らして返事をしてる。

ぼくは今日も、ここで長崎の音を聴いている。

旅の終わり

らすてぃ

路面電車を大浦天主堂で降りて、標識を頼りに歩きはじめる。また坂か、噂には聞いていたがなんて坂の多い街なんだと驚いてしまう。それでも根気強く坂を登った。普段の生活の苦しみや痛み、悲しみに比べればこんな坂を登ることなんて朝飯前だ。

大人になって辛くなったらあんたもあの教会に行ってみんね。

その言葉を思い出して、私は遠路はるばるこの長崎の地にやってきた。
教えてくれたのは小学校のときに出会った長崎出身の先生。先生が持っていた緑のロザリオが光を受けて輝いていたのを、先生の優しい笑顔と一緒に今でも覚えている。転校ばかりで暗かった小学校時代の数少ない眩い光のひとつだ。
亡くなられた時にお葬式に行けなかったのが今でも悔やまれる。

土産物店が並ぶ坂を抜けると、白く美しい天主堂が現れた。
写真を撮る観光客達を横目に入場料を払って、ゆっくりと階段を登って中に入る。するとそこには、ステンドグラスの色彩に彩られた荘厳な空間が広がっていた。思わず息を呑む。聖堂内には人がおらず、案内をする音声だけが虚しく響いていた。
落ち着きなく天主堂の中を見回しながら前に進むと、並ぶ長椅子の上に何かあるのに気がついた。ふらっと近付いてみて見て驚く。

それは緑の玉が連なるロザリオだった。
記憶の中の先生が持っていたあのロザリオにそっくりだった。
薄暗い天主堂で光る、緑のロザリオ。
緑の輝きが椅子の上に零れ落ちている。
そこにステンドグラスが色とりどりの光を落としていて、このロザリオはこの天主堂に完全に調和していた。
先生はここで祈っているんだ。
このロザリオが先生のものではないことは分かってるし、ただの妄想だと言われればそれまでだが、私にはそう思えたのだ。

私は暫くそこで立ち尽くしていた。

息をひとつ吐いて天主堂を後にする。
旅を終えて、元いた場所に帰るために。

下山銭湯

香川 明世

　マウントをとられたり嫌な思いをして気持ちが落ち込んだときに出向くのは、石橋電停から少し歩いたところにある通称「下山（げざん）銭湯」だ。
　ちょっと日に焼けた赤いのれんをくぐり入湯料を払うときに「下山しにきました」というと、番台のおばあちゃんは微笑みながらせっけんを渡してくれる。真っ白で手のひらにおさまる小さなせっけん。少し泡立てるだけで入道雲のようなモコモコの泡となり、疲れた体を包み込み、まるで心のモヤモヤまで洗い流してくれるようだ。
　お湯につかり、壁に描かれている山を見て深呼吸をする。すると湯気が濃くなり景色が一変、登山服姿の私が知らない山の大地を踏みしめている。周りを見渡すとあのときの私がいる。ああそうだった、こんなことを言われて嫌だった。私こんな表情してたんだ。きつかったよなぁ。
　当時の気持ちがよみがえって心がチクリとするけれど、第三者目線というのは当事者のそれよりもはるかに理性があり落ち着いている。そのため、あのときは感じなかった理不尽さに気がつく。

「あの人も実は不安だったんだろう」

「人と比べても意味ないな」

「私の人生の舵取りは私しかできないから」

　私が落ち込む必要はないことがわかった。さっさとこのつまらないマウント山を下山してしまおう。こんなところで立ち止まっているのはもったいない。さっさと下りて、私の道を引き続き歩いていこう。

「無事下山できたかい？」

　湯上がりにスッキリとした私の姿を見て、番台さんが今度は白いフルーツ牛乳を差し出してくれる。自分の色々な持ち味を忘れずに、誰の嫌な言葉にも染まらない。そんな日々が続きますようにという願いが込められているとのこと。

　のれんをくぐれば、またいつもの日常が待っている。でも私は大丈夫。
　もしまた元気がなくなっても、また下山しにくればいい。
　下山銭湯は今日もまた、疲れた誰かを迎え入れる。

落ち語拾い

浅野 宇泰

　終着駅。電車でうっかり寝入ってしまった夏の夕暮れ。「しまった」と口から洩れた言葉は、生暖かい風に飛ばされて消えていった。俯き気味に電車を降りると、停留所の隅に文字が落ちていた。
　大浦橋。大浦橋という文字が落ちていた。その小さな文字を手に取ってみると、炭のような材質なのだろうか、手が少し黒く汚れてしまった。
　追従す 亀の甲羅に見た影は餌やる老爺の面影なのか
　電停のすぐそばには川のような水路が通っている。一番近くの橋を見つけたが、名前は『下大浦橋』であり、大浦橋ではなかった。私が拾ったのは下大浦橋の下がない部分だったのだろうか。再び足元に目をやると、水路の亀と目が合う。亀はこちらに気づいて近づいてきた。私が移動すれば少し遅れて泳いでくる。しばらく、そんな往復が続いた。私が持っているのは大浦橋であって、食えるようなものではなかった。
　失った私の半身今いずこ ただそこにあるかつての栄華
　住宅の密集する路地には、忘れ去られた片方だけのサンダルや鏡が剝がされたカーブミラーが印象的だった。いずれも重要な要素が欠けた存在意義のないものたちであり、一時は居留地として栄えたこの町と、すっかり様変わりした現代とを象徴しているようでもあった。

さ
か
の
ぼ
る
斜
め
に
進
む
エ
レ
ベ
ー
タ
ー
往
復
す
る
も
橋
見
つ
か
ら
ず

妙な起伏が
　諦めて家路に戻るその矢先　　飛び込んできた。
　　学而不思則罔、思而不学則殆
　起伏の正体は、暗きょに埋まった大浦橋と後から知った。電信柱を挟んで二つある石碑が欄干そのものであり、過去の橋の名残を露出させていたのだ。どうやら大浦橋はその形そのままでコンクリートと共に埋め立てられたらしい。
　いつの間にか、持っていた文字は消えていた。
　日の暮れた石橋に、涼しげな風が吹く。
　右の手のひらだけが、不揃いなサンダルのように薄っすらと黒ずんでいた。

居留地の街並み、瓊の浦を一望できる緑豊かな公園、古代のロマンを微かに匂わせるオブジェ。

石橋から走り出す路面電車は、息づく歴史と日々の喧騒をいたずらにかき混ぜる。

長崎伝習所・長崎を舞台にショートショート塾が贈る

ちょっぴりヘンテコな物語とつながる、まちあるきニューマガジン。

軋む線路と弾む走行音に揺れながら、みじかか物語の世界に誘います。

石橋

下山銭湯　/　香川　明世

落ち語拾い　/　浅野　宇泰

大浦天主堂

サウンドスケイプ紀行文　/　森　恭佑

旅の終わり　/　らすてぃ

大浦海岸通

大浦海岸通で降りて　/　らすてぃ

路面スライダー　/　青い

メディカルセンター

長崎ランタン軌道　/　木村　加世子

もう一つの星　/　香川　明世

新地中華街

龍はいずこに　/　鯵

中華街のバイトリーダー　/　もりきち

西浜町

安息の日　/　中岡　党予

すれ違いのその先に　/　堀畑　潤羽

浜町アーケード

あぁアーケードは今日も雨だった　/　片山　健太

？白？昼？夢？　/　灯月白珠